末黒野

すぐろの

末黒野　平成二十三年二月五日発行　第六十六巻第二号（通巻七七四号）

2月号（通巻774号）

新走

小川玉泉

もみづるや足裏に鳴くさざれ石

花芽もつ宮居の馬酔木冬隣

蔵元やふくみて薫る新走

思ふさま枝を川面へ紅芙蓉

柳散り佐原に多き江戸の蔵

行く秋や明治を残す醤甕

大利根の河口間近や雁渡る

百枚の穐田はやも枯るる色

初鵙に肩のほぐるる朝かな

組む稲架の井桁の形や町の小田

立像の露坐の釈迦牟尼柿の秋

病む妻に句ごころ芽生ゆ菊日和

蓮枯れて

松本三千夫

いてふの樹影きつぱりと冬に入る
今朝冬の木橋に固し靴の音
作り滝涸れて日を溜め散紅葉
大根引くをんなばかりの島の畑
綿虫や瀬音昏れゆく杣の道
生きてをり路地の落葉の吹き溜り
垣の茶咲く女師範の書道塾
波郷忌の風どことなく冬めけり
石蕗明り寺苑の空の紺緊まり
たもとほる磯の香の径石蕗の花
またたく星さざめく瀬音懸大根
石のごとく動かざる水蓮枯れて

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

文化の日

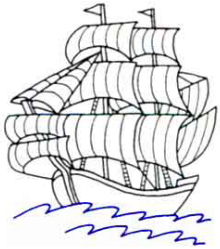
小野口正江

菊活けてゆくりなく観る早慶戦
山の日の傾きやすしななかまど
妖精のごと一本のはぜ紅葉
父の忌の空は海色文化の日
剣道の防具出できし文化の日
生きてゐる痛い足裏や今朝の冬
柊の花こぼし去る布教人
父の忌の終へし枯菊くくりけり
思ひつき浅蜊飯炊く七五三
パトロールの拍子木聞きつ北塞ぐ

山茶花日和

清海信子

くれなゐの雲を浮かべて文化の日
稲掛けて一村の風匂ひけり
菊人形供のきぎすは菊を着ず
爽涼の音のふれ合ひ陶器市
藤は実に風の向ふに保育園
枝の柚子警察官の嗅ぎて去る
あけび蔓引く青天を手繰り寄せ
返り花仰ぎて急ぐ道ならず
神鶏のふくれ山茶花日和かな
服薬の四品せはしや日の短か



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

釣瓶落し　森清信子

筏より暮るる英虞湾秋夕焼
一山を紫紺に釣瓶落しかな
残る虫岸に積まるる醤甕
蔵奥に箱階段や秋湿り
犬吠の野分の怒濤沖暗し
空よりも島昏れ易しすがれ虫
山背負ふ島の漁村や秋灯

秋夕焼　吉田きみえ

木犀を散らすことなき日照雨
秋蝶のつかず離れず磧石
一望の上州平野秋夕焼
木の実降る吾妻渓谷遊歩道
雨止みて小流れ光る紅葉渓
押入れの物捨て切れず冬支度
短日や話のうまき靴みがき

七五三　安斎久英

早き瀬に棹渾身や紅葉船
双峰の間に燃え尽く秋落暉
末枯れや片耳せむる怒濤音
行秋や流るる雲を尾根の堰く
祓はるる曾孫の面持ち七五三
売声を風に曝して酉の市
背に肩に銀杏落葉や神の庭

枯野　大橋伊佐子

結局は秋刀魚となりし夕餉かな
人形の菊にもの言ふ菊師かな
明日ありと信じ八十路の冬用意
飛び立ちてひかりとなれり稲雀
山裾の藁焼く匂ひ冬めけり
枯野なほ枯れきれぬ色抱きけり
短日のビルを上りぬビルの影

仕込み樽　岡田史女

本殿の苔生す屋根や菊日和
懸崖の菊咲き揃ふ宮居かな
冷まじき蔵に林立仕込み樽
荒々と犬吠埼や鳥渡る
ふりかかる黄葉寿塔の覆堂
手捻りの小鉢の乾く小六月
ひだまりや冬のとんぼと乳母車

木の葉散る　小倉正穂

ハミングのやうに瀬音や天高し
喪帰りの余りに青き秋の空
堂裏に下駄干されあり鵙日和
沙羅の実にしてはいささか無骨かな
忘られし駄金魚一尾冬に入る
一片の詩となり渓へ木の葉散る
枯萩に残る風情や大落暉

青炎集

横浜　外山節子

鉛筆の芯減りもせず文化の日
団栗や樹上の栗鼠と目の合へり
跡形のなき歌舞伎座や残る虫
下総や小鳥来てゐる一の宮
臑太き忠敬像や秋高し
雄叫びの犬吠埼や野分立つ

横浜　岡野里子

芦の穂や川風頬に舟下り
新松子古びし蔵は江戸名残り
冷さまじや岩に砕くる五百重浪
秋冷や黒き宮居の神さぶる
流鏑馬の射手は少年初紅葉
流鏑馬の嚆矢の馬場や秋気澄む

小川玉泉選

横浜　鍋島武彦

色葉散る伊能忠敬像の肩
江戸の香を今に佐原や柿の秋
砕け散る沖波幾重台風来
秋闌くや海鳴り遠き夜の句会
秋暑し濠の色濃き青みどろ
菊供へ無名戦士を悼みけり

千葉　岡井マスミ

行く秋や狛犬の頬荒削り
散紅葉乗せて急きたる濁川
捨舟に竿の残され秋の暮
杉玉の古り酒蔵の秋湿り
秋惜しむ小江戸佐原の丸ポスト
残照は雲のうらがは冬館

横浜　山崎稔子

朝挽ぎの秋茄子並べほまち店
藁塚や転げる子等の泥まみれ
里山の繁みの蔭や思草
朝寒や水道水のほのぬくく
留守たのむ夫へ昼餉の零余子飯
天高しころがす玉の脇へ逸れ

横浜　小田嶋野笛

炊立てに黄身の華やぐ今年米
挑むこと忘れし日々や鵙猛ける
早慶戦日和となりぬ文化の日
引力に負くる乳房や林檎剥く
大鉢をよろめき運ぶ菊花展
出鱈目の数言ふ孫や木の実落つ

横須賀　大川暉美

起き抜けの厨にとどく霧笛かな
寄ればすぐ話弾むやぬくめ酒
葉隠れの紅のつぶらや青木の実
冬晴や己が影へと鍬を打つ
停泊の豪華客船冬暮光
煉瓦倉庫続く港の小春かな

横浜　外山生子

戸隠の更けゆく月や蕎麦の花
種とりの紫蘇一本を残し置く
禁酒守る兄の便りや菊日和
奥宮の屋根の苔置く冬隣
酒蔵の梁の煤けや新走
台風の闇を照すや岬の灯

横浜　小林清子

茸山今は売られて仕舞ひけり
松茸と思ふ落葉の盛り上がり
富有柿ひとつ買ふにも重さみて
茹で上げてひとにぎりなる菊なます
棒稲架の稲の乾きを風に聞く
サッカーの練習を見る文化の日

横浜　小山直子

こほろぎの声に安らぐ看取りの夜
林檎煮る優しくなれる日のしじま
県庁の銀杏黄葉や夕明り
灯下親し活字の匂ふ新刊書
茹でこぼす湯の香食用菊美しき
礁みな波を遊ばす小六月

耕土集

四分一の大根で足れり独り住み　横浜　土屋　実郎

冬蜘蛛の一匹と家棲み分けぬ
悔ゆること多々切干の母の味
制服で詣づる園児七五三
冬日燦雑草といふ草は無き

小春日や旅の雑誌に思ひのせ　上野　幸枝

重ね着の楽々出来る齢かな
良き予後を友に祝がるる文化の日
探し物しつつ整頓冬立つ日
余生なほ知ること多し一位の実

関所跡ひと雨ごとに秋深め　長谷川惇子

新蕎麦や壁に電車の時刻表
長瀞に虚子の句碑あり照紅葉
茶の花の雨に匂へる垣根かな
晩秋や秩父の蕎麦の腰強し

松本三千夫選

水碧きダム湖の影や山眠る　鈴木　英男

落葉掻く人背を伸ばし富士を見る
柊の花の香りや星の夜
月の出の風を集めて枯芒
玄冬や闇の奥より救急車

窓辺より別れの曲や秋深く　今村　千年

渡月橋濡らして過ぐる夕時雨
新蕎麦や信濃の宿の桂の香
塩運ぶ歩荷に茶屋の温め酒
塩の道牛方宿へ時雨来る

ネパール―エベレスト街道にて

ガンジスの流れに交尾む蜻蛉かな　正谷　民夫

異教徒の血の祭壇や秋の雷
収穫の芋また埋め冬隣
冬ざれや野辺に乾ぶる牛の糞
秋落暉サガルマータの照り残る